

映画のプロを目指す若

「映像のまち・かわさき」って聞いたことがあるけれど、映画やドラマ、映画界やミニシアターを盛り上げたい!そんな編集ボランティアの想いから、今号では「日本映画大学」に海外から学ぶ

川崎のミニシアター! 『アルテリオ映像館』



川崎市アートセンターへのアクセス

「アルテリオ映像館」は、「芸術・文化の拠点を」という地域の熱い声から誕生した川崎市アートセンター(麻生区)内にあり、日本だけでなく世界各地で作られた芸術性の高い作品や多様な文化的背景を持つ作品が、7日単位で1日4~5作品も上映されています。

また、近隣の日本映画大学の学生による「学生企画上映会」の開催や子どもたちの音づくりや弁士体験などの映画にまつわるワークショップも企画されていました。

館長の関敏秀さんによると、アートセンターは日本映画大学をはじめ名立たる映画界の専門家による委員会を設け、作品や映画業界の動向などを伺い、「文化・芸術のまち」に相応しい作品を提供する一方、サード・プレイスとして、新しい出会いや地域とのつながりといったまちづくりの視点も大切にしているそうです。
(取材・文:川崎市国際交流協会 加藤恵美)



アルテリオ映像館の上映作品

映画のプロを養成する

Q 日本に映画を学びに来たきっかけは?

陳: 子どもの時に『ウルトラマン』など日本の特撮番組が大好きでしたから。

喬帕: 1980年代におじいちゃんが交換留学生で日本へ来ていました。そうした縁で日本の文化や小説が好きだからです。

俞: 小さい時、『名探偵コナン』や『ONE PIECE』『NARUTO 一ナルトー』が好きでした。高校生の時は日本映画の細やかな表現について学びました。中国の専門学校を出た後、薬剤師として働いていましたが、人の死をたくさん目のあたりにして落ち込みました。それで両親の勧めもあって心機一転、映画監督をめざして日本へ来ました。

Q 実際に日本へ来てみた印象は?



陳: 人と接する際、サービス精神が旺盛ですね。とても丁寧です。でも、自分の意見をはっきりと言わないところは苦手ですね。大学がある麻生区は住みやすいです。ここで多くの文化に触れられる日々を送っています。これまで映像を通して見てきた日本は、映像を作った人それぞれの思いが投影された「理想の世界」ともいえます。今、日本に来て、実際の風景を見てみると、まったく違って見えて新鮮です。

喬帕: 街がきれいで、人が多いですね。アルバイトなど日常生活で日本人はよく「すみません」とあやまることが多く、最初は戸惑いました。川崎は静かで、山が見えるのがいいです。来てよかったです。

俞: 日本人はやさしいし、親切です。これは、昔、旅行で行った大阪でも感じました。住んでいる麻生区はとても静かな街ですね。朝から近所のピアノの音がBGMになってとてもよいです。昭和音楽大学もあるからでしょうか。

Q 日本映画大学ではどんなことを学んでいる? 尊敬する先生は?

陳: 主に録音について学んでいます。作品の中のさまざまな場面に応じた環境音、効果音などを録音チームのメンバーや監督



関館長より「アルテリオ映像館」の映画鑑賞券を抽選で5名様にプレゼント!

ご希望の方は協会HP「かわさき国際交流ニュースIGNAL」のサイトからお申込みください。(締め切り:10月31日)当選者には後日、チケットをお送ります。

応募はこちらから→



若者たちとミニシアター

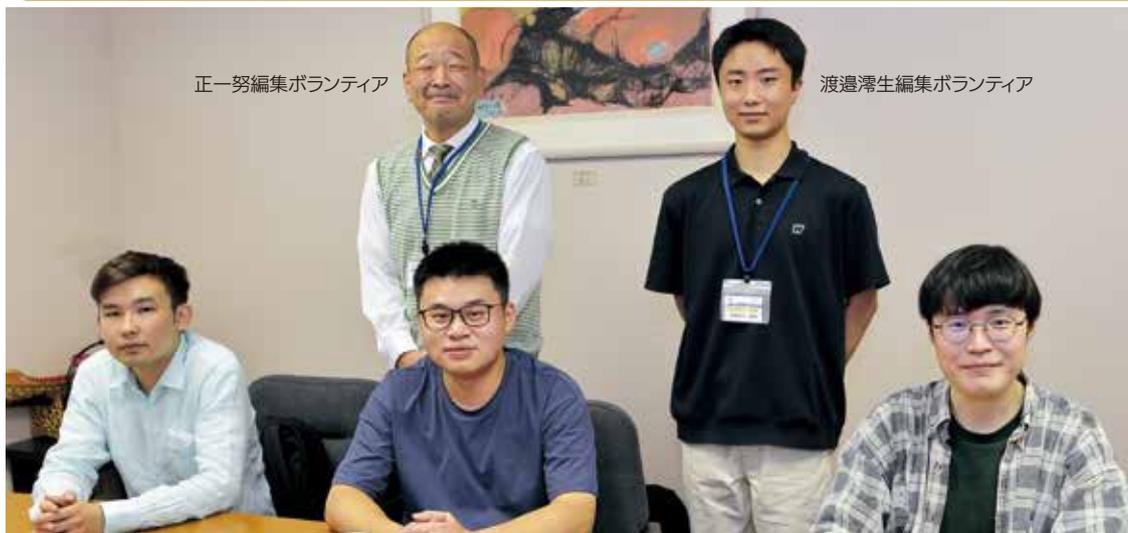
ドラマという視点から見た時、どんな川崎に出会えるのでしょうか。

若者たちと川崎のミニシアター、次号ではロケ地としての川崎とこの秋号と冬号の二号にわたって特集します。

「日本映画大学」へ、海外から学びに来た若者たちにインタビュー

インタビューした川崎市親善留学生※の皆さんと編集ボランティア

※地域の国際化・国際交流活動に協力している川崎市国際交流協会修学奨励金受給留学生



日本映画大学
映画学科3年生
陳 奕翰さん
(前列中央)

中国・深圳出身

日本映画大学
映画学科1年生
喬帕 旭日根さん
(前列左)

中国・新疆ウイグル自治区出身

日本映画大学
映画学科1年生
俞 旭東さん
(前列右)

中国・安徽省出身

とアイデアを出し合いながら作っています。そこで教えていただいている弦巻裕先生を尊敬しています。

喬帕: 撮影について学んでいます。脚本家の丸内敏治先生を尊敬しています。

俞: 演出について学んでいます。映画監督の細野辰興先生を尊敬しています。

リ』(注2) (原題『可可西里』)が好きです。



俞: 大学の創始者である今村昌平監督に憧れています。なかでも『橋山節考』が好きですね。俳優は『溺れるナイフ』『花束みたいな恋をした』の菅田将暉や『トゥルーマン・ショー』のジム・キャリーが好きです。

裏面の醜さ、残酷さに焦点を当てて、それを乗り越えていくような映画で人に勇気を与えたいです。



日本映画大学のHP



日本映画大学

(注1) 1997年のカンヌ映画祭グランプリ受賞作品。人生に絶望した男が、自殺を助けてくれる人を探しもめつつ、生きる意味を知っていく姿を描いた。

(注2) チベット高原北部の秘境ココシリで、チベットカモシカの密猟者を取り締まる有志のパトロール隊員たちを描いた作品。監督は陸川。

Q 好きな映画は?

陳: 撮影当時、最新の3D技術を駆使した『アバター』です。この映画や『タイタニック』を作ったジェームズ・キャメロン監督に憧れています。



喬帕: 日本映画では、小津安二郎監督の『東京物語』や黒澤明監督の『七人の侍』が好きです。日本以外だとイランのアッバス・キアロスタミ監督の『桜桃の味』(注1)や、チベット高原を舞台にした映画『ココシリ』

Q 将来、どんな映画を作りたい?

陳: 最新の技術を使って、さまざまな人間性を描き出し、観客を驚かせ、楽しめるストーリーを描いた映画を作りたいです。

喬帕: モンゴル人がつくった「モンゴル映画」はまだないので、モンゴルの人々の何気ない日常のドラマを撮影した映画を作りたいです。

俞: 監督になって、人間の細やかな心情を描写した映画を作りたいです。人の明るさ、優しさといった美しい部分だけではなく



日本映画大学
宇内映子先生からのメッセージ

「夢の交わる場所」

留学生たちは、生まれ育ったそれぞれの場所から、憧れと夢を抱いて日本にやって来ています。そして、日本映画大学で、映画づくりのノウハウから、手取り足取りでさまざまな指導を受けます。

映像制作の実習を積み重ねていく過程では、もはや、どこの国の出身か、何人か、などという差はなく、文化や言葉の壁を乗り越えなければ、一つの作品をつくることはできません。留学生の野心や発想は、日本の学生たちに刺激と活力を与え、一方で、日本ならではのルールや配慮から留学生も多くを学んでいます。

協働でモノづくりをする日本映画大学は、厳しく苦しい時代だからこそ、若者が希望を持って世界観を更新することができる、映画という「夢の交わる場所」です。